途絶えた願い 残った祈り

過去マリスがマリアに初合神した時のＳＳ。

Posted by @touko_PYRO (/u/touko_PYRO)

予想していた訳じゃない。
ただ……そう、ただ、導かれるように頭に響く『声』に従うままに。
シールが…ビックリマンが自分にとって曰くつきのものだという自覚があったのにも関わらず。
マリスは、そのシールを身体に貼ってしまった。
そして……。

「な、なんでもないっ…！」

　自分の口から出た声がいつもと違う事に愕然としながらも、引っ掴んだシャツを身体に押し付けたまま、後ずさる。
　背中に当たる本棚に、それ以上逃げ道はないと焦りながらも、震えた指を伸ばし、先程のシールに触れると、またしても声が聞こえて。

「…っ…く…！」

　その内容など、分かる筈がないのに。
　自分を「マリア」と呼ぶ声が。
　幾多の本の中から見つけ出したひとつのシールに描かれた悪魔の姿が。
　そしてこの身にまたしても起こった「普通じゃない」現象が。
　――――その全てが、マリスを追い詰める。
　動揺から、頭の内側ががんがんと叩かれたように痛かった。

呼吸も、荒くて。
でもそんな恐慌の最中見た己の手は……小さく、細く。
普段のそれとは違う形に、余計に混乱は増した。

「…嘘、だ…っ…」

自分の手じゃない、と。
それどころか。
視界は低く、縺れる足に視線をやれば、履いていた筈の制服のズボンがずり落ちている。
その上、顔を下げたからこそ……視界を遮る様に胸部に盛り上がるものが、見えて。

「…っ…っ…！」

本来、自分にはあり得ないものだ。
男である筈の自分には…。
なのに。

「何故…こんな…」

は、と震える息を抑えながら、震える奥歯を噛み締める事で意識を保った。
何故。
どうして。
そればかりが頭の中をぐるぐると巡るけれど、その意識の端では原因には気付いていた。

（ビックリマン…シール…）

かつても自分を貶めたあれが。
興味本位で触れてしまったそれのせいだと、理解する。
また変な能力が発動したのだと。

（落ち着け、落ち着くんだ……）

そう、マリスは自分に言い聞かせる。
幸いにも、過去のように何かを操った訳じゃない。
変わったのは、操ったのは自分の姿だけ。
ならば、と。

（今までと同じならシールを剥がせば…）

いい筈、と予想を立て、マリスは己の肌に貼り付いたシールに指を掛ける。
だが、ぺり…と端を持ち上げた時に、ふと。

――――――マリア…。

先程聞こえた、シールの声を思い出した。
はっきりと聞こえたあれは、男の声だったように思う。
まるで既知の相手に語りかけるような口調で、自分を呼んだ声。
けれど、自分の名はマリスであって、マリアではない。
そう思うのに、気持ちには焦りが募っていく。
過去でも、その名をきっかけに悪夢のような事件が起こったではないか、と。

「マリア…？どうして、私が…」

それは、シールに描かれた名だ。
姿だって自分とは似ても似つかない筈。
そもそも性別すら違うのに、と。
訳の分からなさに忌々しく頭を振るが、誰にも答えなど教えて貰えない。
あの声がしたシールは今なお机の上にあるけれど、努めて見ないようにして。

――――――お前が何者か、知りたくはないか。

その声に促されるまま、父の隠し持っていたシールを貼ってしまったけれど。
まるでそうしなければいけないかのように。
だがそこでふと思う。

（私は……操られた、のか？）

たかがシールに？と笑おうとして、その顔は中途半端に歪んだ。
実際に今、自分の姿が変わっている現実が、冗談で済ませられないからこそ。

（何故、私は……）

混乱を極める中で、脳裏に浮かんだのはかつての記憶だった。

『そう、彼女はサタンマリア！』

　父の楽しそうな声を覚えている。
　ビックリマンは、父マシューの趣味で。
　自分はそれに感化されただけで。
　子供ゆえの、シールを貼って遊んだだけで…。

「…ッ？！」

　途端、ジリッと頭の中が何かを訴える。

（ならば何故…）

　何故、シールを操れた？……と。
　困惑の中にもはっきりと、自分の中から問い掛ける思いが浮かび上がって。
父の持つ悪魔のシール。
　そこに、物を浮遊させる力があるなど当然知りはしなかった。
　日本語も読めない。
　なのに自分は、どうして操れたのか。
　普通であれば、貼って遊ぶだけで済んだのに。

（私は、何故…）
（何故、知っていた…？）

　疑問が募る。
　後から後から、湧き出る様に。
　今、自分が操られたように、自分もまた、シールを…悪魔を操っていたと言うなら。
　ビックリマンシールに力があるのではなく、それは。

（やはり、私に……原因が…）

　辿る様に意識を追い詰めていくと、記憶の中にまたしてもかつて聞いた父の声が響く。
　鮮烈に、情景と共に。

『彼女はスーパーデビルの一番の部下だよ』

　だが、違うと感じる。
　違う、そこじゃない…と。
　自分が意図した部分は、そこではなく。

（もっと、そう…）

『すごく強い悪魔ヘッドで』

（もっと、違う……そこじゃなくて）

『悪魔達を超念魔でコントロールするんだ』

　過去に聞いた声、その意味する相手が、まざまざと思い出される。
　だからこそ声を失くし、マリスは足元から冷えてくずおれそうになるのを感じた。

「………まさか…」

　何かを操るだけなのだと、思っていた。
　ポルターガイスト然り、この身の変化然り。
　自分は、自分で。
　しかし、あの「声」は言っていた。
　正体を知りたくはないか、と。
　思わず、マリスは自分の胸元に貼られたものに、手を当てた。
　真四角の小さなシールに描かれた、それ。

（そんなことが……有り得るのか…？）

　じわりと浮かび上がる様に、記憶から選び出されたそれに、ごくりと喉を鳴らし……マリスは徐に顔をある一角へと振り返らせる。
　そこにあるのは————鏡だ。
　壁に掛けられたそれは、身支度をする為だけの、それほど大きくはないもの。
　なのに。
　ふらりと近寄り、恐る恐る覗き込んだ先には、女性の姿があった。

「…っ…」

自分とは似ても似つかぬ細身の、目元の鋭い女性。
しかしその瞳は、驚愕に揺れていて。
知らない紅い瞳が、こちらを見詰めていた。

（違う…）
（違う）
（違う）
（違う、違う…違う！）

これは、私では。
私は、マリスで。
私は…私は…。
そう自分の心の中では叫んでいるのに。
鏡越しに視線を逸らせぬその女性を、今その姿になっていることを。
どこか意識の遠くでは、認めているのが分かることが、一番恐ろしかった。
————知っているのだ、と。
それが、誰なのか。

（私は……私、は？）

浮き上がる様に、頬に赤く…朱を刷くように印が浮かぶ。
同時に、肌が青く染まり始めて。
愕然として見詰める自身の手が、知らぬ色に染まる恐怖。
だが、思わず呻いた口元にも違和感があって。

「…っ…っ…嫌、だ…」

ふるふると細かに震える手を寄せた先、口の中にある異物は自身の歯…それも尖った牙、だった。
在るはずの無い、それが。
いつの間にかに。
厳然として、存在していた。
己として————————『マリア』が。

「あ、あぁあぁぁぁっぁあっぁぁぁ！」

なおも変わり始める、その身だけではなく後になれば合神した姿だと分かる……つまりはこの世界に存在するビックリマンシールの絵柄に酷似した機械装甲が現れ始めるのに、半ば恐慌染みた悲鳴を上げ、マリスは肌からシールをむしり取った。
途端、現れ始めた装甲が霞と消える様に失われ、光の粒へと変わるのに安堵していると、悲鳴を聞きつけたのだろう、荒々しく走る足音が部屋の外に響いたかと思うと書斎の扉が大きく開く。

「マリスッ！何が……」

慌てた表情で部屋に飛び込んできた父の姿に、蒼褪めているだろう顔を向けてしまうが、はっとして己の身や手を見返せば、そこには見慣れた自分の手足があって。

「……………あ…」

元に戻ったのだと張っていた気持ちに苦々しい気持ちで息をつけば、それをどう思ったのかマシューは部屋の中を見回して……マリスの足元に落ちる「サタンマリア」のシールを見つけ、息を飲んで見せる。

「マリス……」

その、おずおずとした…けれど気を遣うような声音に、マリスもまた落ちているシールを見遣り、顔を伏せた。
とてもではないが、この姿に変わったなどと言える筈もない。
そして到底信じられる話ではないが、自分の正体がそれなのだとも…。
だが、沈黙をどう取ったのか、マシューが数歩近寄り、俯いたマリスの頭を優しく撫でる。

「……見つけてしまったんだね」

悲しげな声は、謝罪であり、労わりでもあり、心配でもある…親からの深い愛情が込められていて。
それは、かつての自分が犯した「有り得ない筈の行動」にかかるからこそ、マリスは小さく唇を噛んだ。

「ごめんね、マリス…」

そっと引き寄せ、抱き締めてくれる父に、マリスは泣きたくなった。
　鼻の奥が痛くて、喉が震えそうで。
　今ある、当たり前の日常が……すでに自分にとっては遠かったのだと。
　認めたくなかった、異質な自分が。
　こうも思い知らされては、もう目を逸らす事も出来はしない。

（私はやっぱり、普通じゃなかった…）
（普通でいたかった）
（普通には、もう生きられないのだろうか）
（私は————マリアになるしかないのか）
（でも、私はマリスだ…）
（私は、私…は…）

　幾つもの思いが浮かんでは消え、マリスを追い詰める。
きっと、トラウマとなるシールを見てショックを受けていると考えているだろう父の庇護の腕の中で。
　飽和する感情の中、震える胸にじわりと浮かんだ温かさに身を委ねる。

「………パパ」

　自分は、ビックリマンの事を何も知らない。
　父に絵本代わりに聞かされたキャラクターの事を幾つか知るぐらいで。
　同級生が話す話題にすら忌避してきた。
　なのに。
　どうして、………どうして。
　その言葉が出たのかは、分からないけれど。

「マリス？」
「………パパは、……天使のシールは持ってる？」

　ぽつりと口をついて出た問いに、マシューは申し訳なさそうに眉を下げて首を振る。

「いや、…ごめん天使は…」
「ううん…ううん、いいんだ」

分らないながらに、胸に少しだけ浮かんだ光は、父の温もりに紛れて淡く消え失せる。
それを切なく思う気持ちにすら気づかぬまま。
ただ、目をそっと閉じて。
諦めともつかぬ想いに、涙が一筋零れる。

認めたくない。
認められない。
だから、認めない。
その後次第に思い出される記憶に苛まれる毎に、頑ななまでに全てを拒絶をして。
救いなど無いと、一度覚えた絶望は、その後長い時間マリスを捕える事になる。
いつかの時、――――――再びの出逢いが消えた筈の胸の温もりを思い出させるまで。